自閉傾向をもつ精神運動発達遅滞児における要求行動の検討

動きの多い幼児の一事例から

池田真弓

(淑徳大学大学院 総合福祉研究科)

キーワード：精神運動発達遅滞児 要求行動

A Research about Request Behavior of Psychomotor Retardation Children Having Autistic Tendency

From A Case of Hyperactive Infancy

Mayumi Ikeda

(Shukutoku Univ, Graduate School of Integrated Human and Social Welfare Studies.)

Key Words: Psychomotor Retardation, Request Behavior

目 的

発語以前の発達段階にいる幼児の要求行動に適切に応答するためには、その行動を正しく判断することが求められる(磯貝ら,1995)とされており、自由な発語が難しい発達障害児においても、その行動を周囲が適切に理解することが必要であると考えられる。

多動・自閉傾向のある幼児は動きの多さから、その行動の意図を読み取ることが難しく、また対人相互交渉が取りにくいとされている。以上をふまえて、本研究では、療育場面において対象児(A児)の加齢に伴って、どのような要求行動(言葉)が現れてくるのかを体系化し、その変化について検討を行うこととした。

方 法

対象はB療育機関に週2日通う、精神運動発達遅滞と診断されたA児(データ分析時6歳4ヶ月)である。A児は、3歳で「中～重度精神運動発達遅滞」と診断をされ、5歳2か月でこだわりの強さから「自閉傾向あり」と指摘された。本研究の観察期間は3歳8か月から5歳7か月までとし、週1回、1時間行われる療育場面(計51セッション)をビデオ録画したものを分析に使用した。分析方法としては、要求行動として認識することができたエピソードを集約し、分類化していく手法として、KJ法を用いた。行動を11のカテゴリーに分け、1年ごとの回数を記録した。

結 果

観察を行った2年間分のデータを2期(1年ごと)に分け、A児の要求行動と定義した行動について、行動の種類、回数を図1に示す。

図1 1年ごとの行動の回数の比較

考 察

1年目では、言葉による具体的な要求伝達の方法が少なく、『あーあー』といった「発声」で要求を伝える方法が多く見

られた。また、「リーチング(対象物に向かって手を伸ばす)」や「クレーンハンド(大人の手を引っ張る)」といった、大人に直接的に働きかける行動が主の要求伝達の方法となっていた。それと比較して、2年目では、1年目ではよく見られていた「発声」が具体的な「言葉」に変化していった。意味のある言葉が多く表出されるようになったことで、大人が理解しやすくなり、それが要求を伝達するための手段ともなっていた。

要求行動の全体数を比較すると、1年目では102回、2年目では139回と要求伝達の種類増加とともに全体数も増加していた。また、回数だけではなく、行動の質的な変化も見られた。「泣く」ことを例として挙げると、回数としては大きく変化はないが、全体としての割合は減少していた。その役割についても、1年目では、A児が楽しんでいたものを止められた時の拒否の要求サインとして見られていたが、2年目になると、トイレに行きたいことをうまく伝えられないことによる、排泄の要求サインとして見られるようになった。

要求行動が大幅に増加した要因としては、A児に教材の好き嫌いが明確に現れたことが考えられる。認知が育つと事物の好き嫌いがはっきりし、拒否と要求が出現するということは、対人意識の育ち始めとして、他者への拒否と要求となつてあらわれるともいえる(宇佐川,2007)。そのことから、認知の育ちによって拒否や要求が明確にあらわれるようになったことが、これらの要求行動の増加につながっていったと考える。

霜田(2003)の研究によると、発声・発語への移行については、要求行動そのものを十分に確立し、指導機会を保証できたり、発生頻度を上げたりできたのは、標的行動を初めから発語によるものではなく、クレーン行動を含む要求行動から漸次的に発語まで対象児の標的行動の獲得具合に合わせて設定した基準変更デザインに因ると考えられている、と示されている。本研究の対象児においても、発声・発語へ移行する段階において、クレーンハンドなどの要求行動や、対象児の要求行動の体系化を行うことによって、成長に伴う要求行動の変化を見つけることができ、また、身振りや選択肢を示すというような、対象児からの行動を引き出すといった療育者側のかかわり方の重要性も示唆することができた。

引用文献

- 磯貝順子・小池敏英・佐藤進・堅田明義(1995).重度精神遅滞児の要求表出行動の療育者の判断に関する研究 第33巻 第1号 pp.17-24
- 宇佐川浩(2007).障害児の発達臨床Ⅰ 感覚と運動の高次化からみた子ども理解 学苑社
- 霜田浩信(2003).発達障害児における要求言語形成手続きの検討—基準変更デザインによる要求行動から要求言語への移行— 『教育学部紀要』文教大学教育学部 第37集